

Title	『ロミオとジュリエット』をクィアに見る：乳母の関与がもたらすもの
Sub Title	Queering "Romeo and Juliet" : the problematic nurse and an emergent ideology of love
Author	小町谷, 尚子(Komachiya, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.42 (2003. 3) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	An emergent ideology of love in Romeo and Juliet appears to have been central and centrally attacked in the controversy over a defiant daughter in a patriarchal society. Thus, a study of the ways in which Shakespeare deals with an integral part of the family, Juliet and her father, reveals, from one perspective that of how he employs the relationship of the father and the daughter he uses the father's redemption as negotiation of the father-daughter relationship and reconciliation between the feuding families, all of which mirror the social circumstances of the early modern society. From another perspective that of why he questions this kinship bond he employs the relationship among the family for the positive purposes of subversion, thereby again commenting on the social mores of the period. However, Shakespeare does not romanticize or idealize the father-daughter relationship. Rather, in such a relationship he creates a female subject for larger societal issues that inflamed his era. He presents this with those who form a homosocial bond with the heroine to interrogate gender, generational and familial issues, as well as the relationship of the society to the individual. Employing the strategy of Queer Theory, this paper reveals the fiction of forced heterosexual love in a patriarchal society, and then shows that the Nurse is a queer agent who serves as an internal director, manipulating and exerting control over Juliet, ranging from influencing the development of Juliet's sexuality to helping her depart from a traditional role as an obedient daughter. Her function and impact seem to be closely related to the qualities she possesses. Thus, the paper's primary focus is upon the role of the Nurse who affects cross-gender relationships for either good or ill.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20030331-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20030331-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『ロミオとジュリエット』を クイアに見る ——乳母の関与がもたらすもの——

小町谷 尚子

## 序

ジュリエットと乳母との関係を基軸として『ロミオとジュリエット』を考えると、家父長制社会における愛と性にまつわる動きにアンビヴァレンスが存在することが読み取れる。ひとつは家父長制を支え、その社会の住人になろうとする動き、もうひとつは家父長制の規範に逆らってゆく動きである。乳母はジュリエットを養育し世話をする母親代理の役割を担って社会への同化をはかる人間であり、一方、その社会に逆らい、離れようとする意識を具えた人物でもある。こうして見ると、乳母は対極にある働きを有するように見えるが、それらの働きは互いに相反するものではない。たしかに、ロミオの追放後、乳母がパリスに乗り換えるようジュリエットに勧めるくだりは、家長キャピュレットに従った乳母が家父長制に回収されたと読むこともできるだろう。他方、そこには、自然の野蛮さや不条理な力を読み取ることもできる。しかし、ジュリエットの乳母からの分離は、彼女のキャピュレット家からの孤立と方向性の確定において欠くべからざる役割を果たしている。よって、乳母とジュリエットとの関係は単なる代理母と養い子というよりももっと複雑で多層的な関係であると言える。ジュリエットのセクシュアリティの形成における乳母の役割を見るとき、乳母はジュリエットに依存を許し、甘えさせる存在であると同時に、ジュリエットに及ぼすその支配力が家父長制を脅かす存在でもある。乳母の言動と恋人たちの最期を見直すとき、家父長性社会内部で持ちつ持たれつの不可欠な関係がその枠を越えて働くとき、本来優遇されるはずの異性愛が抑圧されるという事実が浮き彫りになろう。

拙論において、クィアに見ることとは、異性愛中心の人間関係を同性愛によって説明するという狭義のクィア理論によって立つものではない。クィア理論提唱者 Teresa de Lauretis は、ゲイ・セクシュアリティを「社会を形成する際の媒介として機能し、社会に対して相互作用的でありつつ抵抗的であり、参与しつつも特殊性を持ち、平等と差異を同時に求め、平等な政治参加を要求し、実質的、歴史的個別性にこだわるもの」と述べている。<sup>1</sup>この原点から出発することで、男性／女性というセクシャル・アイデンティティやセクシュアリティで自己の存在理由を捉えることがなくなり、また、既存の性領域を含んだ社会全体の役割分担や規範から解放されることになり、性差の解体が、そして、セクシュアリティの装置からの脱出が可能となった。拙論は、クィア理論のもたらしたこの効果が、家父長制内部で抑圧される異性愛へと対象を転換しても、確認されることを明らかにしようとするものである。したがって、『ロミオとジュリエット』を新しい視座と枠組みで捉えなおすことを試みるにつき、社会、文化、制度において、既成の秩序に従わぬという意味で、クィアという用語を戦略として用いるものとする。

## I. セクシュアリティ形成に見る両義的側面

『ロミオとジュリエット』研究におけるフェミニストの批評は、家父長制とジェンダーをキーワードに展開されてきた。たとえば、女性の従属が家父長制を支えるという前提からロミオのアイデンティティ形成を論じた Coppélia Kahn,<sup>2</sup> それに対して、家父長制の圧力によって揺れ動くジュリエットの性を分析した Irene Dash,<sup>3</sup> あるいは、家父長制の性の二重基準に逆らって対等な愛を貫くジュリエットの失敗をあぶり出した Marianne Novy の批評がある。<sup>4</sup> また、Marjorie Garber によってジュリエットの成長に通過儀礼を読む文化人類学的アプローチも紹介された。<sup>5</sup> 一方で、ロマンティックな愛の謳いあげを、新しい時代の要求に一致する愛のイデオロギーの表出と読む Dymphna Callaghan の文化唯物論の立場からの解釈がある。<sup>6</sup> 性的含意に満ちた台詞を

取り上げ、若者たちの生と死の物語にセクシュアリティの言葉が交錯し融合していると指摘した岩崎宗治の論考も示唆に富む。しかし、この悲劇を文化的構築物として見て、家父長制における女性の役割を自明のものとして論を展開しているため、人物の変容についての分析に限りがあった。<sup>7</sup>このように、いずれの批評も、家父長制の社会規範にそむく恋人たちの意味を取り上げているが、その視点が他の登場人物や周囲を交えた有機的な関わりを論じるのに十分に活かされることはなかったようである。一方、かつて、Barbara Everett が、乳母を自然の表象と見て、その発言がジュリエットの性愛の発展を暗示すると読み、道化としてのその役割から逆照射して主題の分析に迫りはしたものの、あくまでジュリエットの成長を焦点とし、他の人物を含めた劇的展開や自然と社会の関連を考察することはなかった。<sup>8</sup>これらの先行研究を踏まえ、『ロミオとジュリエット』を社会と人物が働きかけ合い、ぶつかり合う場として捉え、鑄型に押し込むことなく、セクシュアリティと主題の関連を今一度考え直す必要がある。

ジュリエットのセクシュアリティ形成の模様に、支配的な言説に対する異議申し立てを読み取ることができる。キャピュレット家で大切に育てられたジュリエットの両親の期待に反する結婚が物語の明暗の両面を作り出していると見ることは、結局は、娘は父の命令に従う受身の存在として固定化したという男性主導の欲望を内在化させた物語と読んでこの劇を矮小化、卑小化してしまう。主人公二人の成長の背後にあるものは何かということに目を転じてみると、家父長制を支える再生産行為（生殖）を目的とした異性愛からの二人の逸脱を、他者、そして外部が可能ならしめていることに気がつく。とりわけ、家父長制社会を揺るがす力が涵養される拠点として重要な役割を果たすジュリエットは、同時にこの社会を成り立たせる強制的異性愛の問い直しを明るみに出す磁場でもある。

ジュリエットは乳離れや結婚を経て変容する。Theodora A. Jankowski は異性愛に基づく権力構造をあばき脱構築をはかる目的で、結婚の強要に抵抗する処女の意義を探っている。家父長制の維持は女性の結婚、つまり、女性が家

父長制の性の経済において商品としての役割を果たすか否かに委ねられている。よって、virginityの保持は女性の抵抗を意味し、異性愛に基づく世界を揺るがすこととなる。この観点から、Jankowskiは、女性登場人物を三種類に分類する。1) 抵抗を見せつつも最後には結婚生活に収まって家父長制の安定に貢献する従順な女性、2) 自分の役割に疑問を投げかけ家父長制に挑む自立した女性、そして3) 徹底的に家父長制の性の経済を拒絶する女性である。<sup>9</sup> さて、ジュリエットをこのいずれかに分類することは難しい。当初、ジュリエットは持ち出された結婚話に、そのような身の誉れは夢にも思わなかったという常套文句で応える (I.3.68)。結婚に対する現実感が伴ってこそくないが、父に従順に従うであろうと予期される女性、すなわち Jankowski の 1) の型の女性として登場する。つまり、ジュリエットは男性同士の絆を強化するための交換物として働き、家父長制社会に丸くおさまるはずの娘であった。しかし、ジュリエットが恋人ロミオとの関係を優先させてゆくとき、家父長制社会における理想的な異性愛関係、つまり、男性間の結束の強化に奉仕する異性愛関係がもはや成立しないことは明らかである。そして、この社会の理想的異性愛関係は、強制を拒むジュリエットの自由な愛の選択によって、疑問を投げかけられる。ジュリエットのセクシュアリティ形成には、その両面的価値が巧みに重ねられているのである。

## II. クィアな社会とクィアなファミリー

ジュリエットの逸脱を論じる前に、モンタギュー家を嫌悪する父キャピュレットの家父長権が実体性を失っているという背景に注目することには意味がある。ヴェローナの町は政治においては大公を、信仰においてはロレンス神父を長とした家父長権が力を振るう社会である。宿敵同士のキャピュレット家にもモンタギュー家にも、父親を頂点にした家父長制の構図を見ることができるところが、キャピュレットはその最初の登場場面において、彼の権威が弱まっていることが露呈されてしまう。両家のけんか騒ぎにキャピュ

レットは割って入ろうとし、剣を持ってくるように召使に命じると夫人が代わりに杖を持ってくるように頼む。

Capulet           What noise is this? Give me my long sword, ho!  
 Capulet's Wife    A crutch, a crutch — why call you for a sword?  
 Capulet           My sword, I say. Old Montague is come,  
                     And flourishes his blade in spite of me.           (I.I.71-74) <sup>10</sup>

ここで、キャピュレットが老人であり、騒ぎを収めるだけの力を持たないことが不吉にも示唆される。いさめに入った大公の台詞にも、長老たちにふさわしいのは杖であることが重ねて示されており、年老いた者たちがしゃしゃり出ることの不自然さが強調される。

Prince            By thee old Capulet and Montague,  
                     Have thrice disturbed the quiet of our streets,  
                     And made Verona's ancient citizens  
                     Cast by their grave beseeming ornaments,  
                     To wield old partisans in hands as old,  
                     Cankered with peace to part your cankered hate.   (I.I.86-91)

家父長制社会を足元からすくうのはこの弱体化した父世代であると言ってよい。シェイクスピアは、若者たちの逸脱を弾劾した材源の Arthur Brooke の *The Tragical History of Romeus and Juliet* (1562) とは異なる背景社会と社会通念を描いて、あらかじめ社会そのものにも悲劇にいたる仕掛けを用意したのである。<sup>11</sup>

さらに、キャピュレット家の悲劇の元は家父長権の失墜に求められる。舞踏会において、ロミオを見咎めていきり立つティボルトにキャピュレットは事を荒立てぬよう我慢を強い、耳を傾けぬティボルトを叱責するが、説得に

成功したとは言いがたい。キャピュレットは主人たる自分を前面に押し出し、暴君と言っても良いほど威圧的に相手をねじ伏せる態度に出るが、ティボルトは怒りを煮えたぎらせ、我慢の借りを返すことを心に誓っており、表面的にしか家父長権が及ばないことが明らかとなる。キャピュレットが家の長としての力を十分に発揮せず、ティボルトという危機を内包していることは、男性の結束を基盤として成り立つ家父長制社会の秩序におけるほころびなのである。

### III. ジュリエットをめぐる女性たちのクィアな輪

家父長制に内包される危険因子はキャピュレットやティボルトだけではない。女性が家父長制の性経済の商品としての役割を担うとき、その社会の安定がはかれるという前提からすれば、キャピュレット家の安定はジュリエットの結婚に委ねられることになる。よって、キャピュレット夫人と乳母のジュリエットの結婚話への関与はキャピュレット家の安泰に重大な意味を持つ。しかしながら、パリスとの結婚問題に際しての、キャピュレット夫人と乳母の結婚談義はジュリエットのクィアなセクシュアリティの形成を後押し、キャピュレットの思惑に逆らう結果をもたらす。

パリスからの結婚の申し込みにキャピュレットはジュリエットがまだ幼すぎるのではと答えている。

Capulet	Let two more summers wither in their pride Ere we may think her ripe to be a bride.
Paris	Younger than she are happy mothers made.
Capulet	And too soon marred are those so early made. Earth hath swallowed all my hopes but she; (I.2.10-14)

実際、キャピュレット夫人と乳母が適齢期の問題を語るとき、明確に示され





Nurse                      No less, nay, bigger — women grow by men.     (I.3.83-97)

ここで、表紙の欠けた本、装丁されていない男の意味するものは、岩崎も指摘するように、妻のいない単身者は不完全であるということである。<sup>13</sup> そればかりかむしろ、女性の優位を裏書きする台詞とも考えられる。ここでは、父から夫の元への身柄の移行について、支配するもの／支配されるもののジェンダー・ポリティクスが逆転し、男性は対象化され、女性の能動性が肯定されているのである。加えて、女性が男性によって子をもうけると言及する乳母の台詞には、女性が“weaker vessels” (I.1.14-15) から女性主導の生産的な身体へと捉えなおされていることがはっきりと示され、ここにも女性主体を確認することができる。Callaghanは、これに先立つジュリエットの乳離れについての乳母の回想に、家父長制に従いながらも女性が示す肉欲、母性、性愛を見ると同時に、キャピュレット夫人の「この愛という本」というロマンティックな台詞が劇を支配するものと捉え、この場面の重要性を強調している。<sup>14</sup> このように見たとき、女性の社会への関与が認められ、また、支配的な価値基準に対して下位に甘んじていた関係性は恣意的なものであったとして否定されるだろう。

しかも、家父長制の束縛から解かれた女性の欲望／反発関係は、キャピュレット夫人が乳母を立ち会わせてジュリエットに説く場面が男性不在である点にも如実に表されている。二人の結婚観から、家父長制における再生産の装置にはとどまらない新たな意味が女性の役割に付与されていると見てよい。主役は女性なのだと雄弁に物語っているのである。つまり、Callaghanの指摘した女性主体とその欲望が、ジュリエットとキャピュレット夫人、乳母との関係において形成されることが確認されよう。したがって、キャピュレット夫人と乳母が築く女性版ホモソーシャルボンド（社会的に同質な絆）がジュリエットの能動性を引き出し、男女の主／従の対の関係を解体する装置として機能しているのである。<sup>15</sup>

この対の思想解体に加えて、さらに、寡婦である乳母と子を生すことのない

いキャピュレット夫人とともにあることが、非生産的に一生を終えるという暗い影をジュリエットに落としていることも見逃すことはできない。性的な身体を持たない存在がジュリエットを性的な存在として扱うと同時に、上述したような非生産的な身体のもたらす現実——家系の存続の危機——を見せつけ、はてに待ち受けるものが、実りのない世界であることを、基調に響かせているのである。

この女性たちの絆は、ロミオの追放の決定後にパリスとの結婚を拒むジュリエットを家長キャピュレットの意に沿わせようとする際にもその力を発揮する。いったんはジュリエットをかばってキャピュレットにたてつく乳母は、キャピュレットの怒りにふれて沈黙する。夫人と声を合わせて、キャピュレットとジュリエットを和解させようとする乳母は、夫妻の退場後、ジュリエットの信頼を逆手にとり、掌を返したように彼女にパリスとの結婚を勧める。

Romeo is banishèd, and all the world to nothing  
That he dares ne'er come back to challenge you;  
Or if he do, it needs must be by stealth.  
Then, since the case so stands as now it doth,  
I think it best you married with the County. (III.5.213-17)

ジュリエットの結婚を知る乳母の変化は重要である。かつて、ジュリエットの結婚を推し進めた当の彼女が、ジュリエットに利己的、悪意的、そして破壊的とも思える言葉をかける。それは家父長制が基づく秩序を破壊しかねない野蛮な態度であるが、彼女の体質は原始的であり、ノルムに縛られない自由さが与えられていると見ることができる。かつてジュリエットに授乳した養育の恩を口にした彼女は、支配的な面を有していた。乳母の結婚におけるセクシャルな面の強調は俗的であり、ジュリエットの性急な結婚を進める原動力となっている点から見ても、ジュリエットと乳母との愛憎関係の背後には両義的な側面がある。女性版ホモソーシャルボンドの挑発によって発生す

るセクシュアリティこそ、実は家父長制によって抑圧されていたものであり、乳母はそれを外面化する装置、回路、媒体として機能するのである。他方、乳母がキャピュレットによって、また、ジュリエットによって、罵倒されることはどちらの側とも正反対にある人間であったことを示している。乳母が調和をもたらす存在ではなかったことは、ジュリエットの恋の行方にも作用するのである。そして、ジュリエットが乳母に示す女性によるミソジニーは、彼女が縛られていた家父長制を支える異性愛からの離脱のために必要な呪詛であったのだ。この女性版ホモソーシャルボンドの作用に、マキューシオ、ベンボーリオ、神父、ロミオらが綾なすホモソーシャルボンドが、相乗効果をもたらしている。男性版ホモソーシャルボンドの働きにより、男性同士の絆による家父長制への貢献に対して懐疑の目が向けられ、虚構の強制的異性愛に対する嫌悪感が出する。ロミオの場合、マキューシオの抑圧された憤りとベンボーリオの真面目な友情にロミオの決心の原因が求められる。男性版、女性版ホモソーシャルボンドは問題点を浮上させる触媒であり、互いにはらの関係にある。両者が絡み合うことで生成されるものについては稿をあらためて論ずることとし、ここでは、同じ社会性を有すると見られる親密な間柄の共謀者に主人公の道案内が託される構図に、劇のシナリオが見え隠れしていることを確認しておきたい。

#### IV. クィアな異性愛の形成とそれを推し進めるもの

子孫を産む身体性の価値を女性に認める家父長制のあり方は、父娘、ジュリエットと母や乳母との関係のどちらにおいても肯定されているが、ロミオとの結婚が成立した時点で、ジュリエットの身体性の価値は、ロレンス神父も言うように、モンタギュー家とキャピュレット家の不和を解決するという一点にしか求められない。



このとき、彼女のセクシュアリティは欲望の客体ではなく主体として発現する。能動と受動の異性愛関係を逆転させたとき、ジュリエットとロミオとの結婚は、家父長制社会が理想とする結婚を否定することになるのである。

若者たちの悲劇的破局への道筋をつけたのは乳母とロレンス神父の二人である。二人の重要性は、家父長制における役割からの逸脱——家族の絆を断裂する——という点に求められるが、乳母はその滑稽な言動に、神父は劇の良心としての働きにのみ注目が集まり、ともに従来軽視されてきたと言わざるを得ない。<sup>16</sup> ロミオにしてもジュリエットにしても、家父長制社会から逃れることはできない。家長に背いては信仰上の長であるロレンス神父、そして、ジュリエットにおいては神父に加えて養育してくれた乳母に頼るほかに術はない。この若い二人が頼りとした大人二人の取った行動を、家父長制の内部と外部の力の絡み合うインタラクションの場として捉えなおすことができる。乳母も神父も異性愛関係の外部に存在するものの、家父長制社会において、家長と共犯関係にあるはずであった。しかしながら、乳母はその養い子の結婚を家長の決定に従って進めるべきであるのを、養い子の情熱に負けて、家長の命に背く手伝いをしてしまう。神父は恋人たちの結婚が家父長制の性経済に基づくものでないこと、両家長の許しを得ないものであることを知っていながらにして、両家の不和の解決を託すという高望みをする。そして、密かに二人の結婚、ロミオの追放が決まって後も二人の再会の時を整えることによって、家父長制社会の原則に逆らう。いったん束縛が解けたジュリエットと、直情的なロミオとの二人のセクシュアリティを封じ込めると同時に制御しようとする神父の目論見は、家父長制そのものを統御する力として働く。しかし、結果として、神父がもくろんだ調和をもたらすはずの結婚は、男性同士の関係強化に貢献せず、男性ロミオが女性ジュリエットを包摂することもないまま、家父長制社会に相容れないクイアな異性愛と化して不備に終わるのである。

キャピュレット家の家父長制体制を磐石なものにするのはジュリエットと

パリスとの結婚であった。家長であるキャピュレットの命は、性の経済を順調に活動させ、家長長制に逆らう新たな可能性を禁じて、従来どおりの硬直した力学的な関係に基づく異性関係を築くことを良しとしていた。そう考えると、乳母とロレンス神父の行動に家長長制そのものへの挑戦を読み取れることもできそうである。実際、異性愛の外部にある二人が、内部で共犯関係を結んで家長長制を支えると見せて、内実は裏切っている構造を見出す時、家長長制の基盤が異性愛に基づくものであるとは虚構であること、そして内部から支える好ましい共犯関係の協力なくしては家長長制の存在が危うくなることが確認される。ロミオと神父の結託、ジュリエットと乳母の絆は、家長長制社会における自然な異性愛行為を支えるべきであるのを、その役目を果たさず、家長長制の実なき虚構を暴く物差しとなっているのである。

### 結語：クィアなエンディング

最後に、性の経済に組み込まれることなく意志を持って死に赴いた若者の存在の意味を再考する必要があるだろう。ジュリエットはロミオとの契りを重んじ、パリスとの結婚を拒絶して自立的にキャピュレット家からの独立に及んでゆく。ジュリエットは結婚話の折のキャピュレット夫人と乳母の誘導により、ロミオとの出会いから急速にセクシュアリティが形成されるに及んで、一気に家長長制の従順な娘の規範をはずれてゆく。そうして、構造の緩んだ家長長制体制において、内部から本来の役割をはずれたクィアな進行役である乳母と神父が、両家の不和を解決するという異性愛体制の虚構を囚らざるも露呈して、異性愛の抑圧に貢献したことに気づく。

となれば、終幕の黄金像の建立は何を意味するだろうか。たしかに、家長長制社会に逆らわぬ異性愛の顕在化と見ることも可能である。あるいは、ロマンティックな愛の謳いあげへの期待は裏切られて、代わりに家長長制の安定は結局のところ家長の認めるところにおいてのみ果たされるという帰結を見ることもできるように思われる。しかしながら、黄金像はジュリエットの

貞節をたたえるという目的の裏で、ジュリエットがそのセクシュアリティの赴くまま、家父長制に受け入れられぬ異性愛を全うしたことを訴え、家父長制における娘のステロタイプに挑戦した表象となっている。しかも、黄金像は家父長制社会において男性中心、異性愛中心の構造と、その構造を放棄した恋人たちの姿との双方の性質を同時に提示し、それにより家父長制社会におけるセクシュアリティを、クィアである、ないに関わらず正当化し、反復し、再生産して具現化するはずのものであったのだ。さらに、主人公二人の黄金像の建立が約束にとどまり視覚化されないことは、新しいイデオロギーの構築に対する一種の保留と見てもよい。乳母という共謀者によって、調和的と見える物語を百八十度反転させることも可能なのだ。絶対的な家父長制の維持は約束されないというのがこの物語の核心ではなかったか。

## 注

拙稿は、第41回シェイクスピア学会（於東京女子大学、2002年10月開催）セミナー「『ロミオとジュリエット』を読む」において口頭発表したものに大幅に加筆修正を施したものである。

1. ...rather than marking the limits of the social space by designating a place at the edge of culture, gay sexuality in its specific female and male cultural (or subcultural) forms acts as an agency of social process whose mode of functioning is both interactive and yet resistant, both participatory and yet distinct, claiming at once equality and difference, demanding political representation while insisting on its material and historical specificity.” Teresa de Lauretis, “Queer Theory: Lesbian and Gay Sexualities : An Introduction.” *Differences*, 3.2(1991), iii-xviii.
2. Coppélia Kahn, “Coming of Age: Marriage and Manhood in *Romeo and Juliet* and *The Taming of the Shrew*,” *Man’s Estate: Masculine Identity in Shakespeare* (Berkeley, Calif.: U of California P, 1981), pp.82-118. 家父長制とジェンダーのかかわりに視点を置いた批評は、ほかに、Martin Goldstein, “The Tragedy of Old Capulet: A Patriarchal Reading of *Romeo and Juliet*.” *English Studies*, 77 (1996), 227-39; Thomas Moisan, “‘O Any

- Thing, of Nothing First Create!': Gender and Patriarchy and the Tragedy of *Romeo and Juliet*," *In Another Country: Feminist Perspectives on Renaissance Drama*. Ed. Dorothea Kehler and Susan Baker. (Metuchen, N.J.: Scarecrow Press, 1991), pp.113-36.
3. Irene G. Dash, "Growing Up: *Romeo and Juliet*," *Wooing, Wedding, and Power: Women in Shakespeare's Plays* (New York: Columbia UP, 1981), pp. 67-100.
  4. Marianne L. Novy, "Violence, Love, and Gender in *Romeo and Juliet* and *Troilus and Cressida*," *Love's Argument: Gender Relations in Shakespeare* (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1984), pp.99-124.
  5. Marjorie Garber, *Coming of Age in Shakespeare* (London: Methuen, 1981).
  6. Dympna C. Callaghan, "The Ideology of Romantic Love: The Case of *Romeo and Juliet*," *The Wayward Sisters: Shakespeare and Feminist Politics* Ed. Dympna C. Callaghan, Lorraine Helms, and Jyotsna Singh (Oxford: Blackwell, 1994), pp.59-101. 次の批評も初期近代におけるイデオロギーの構築を劇から読み取るものである。Susan Snyder, "Ideology and the Feud in *Romeo and Juliet*," *Shakespeare Survey*, 49 (1996), 87-96.
  7. 岩崎宗治「家長長制とセクシュアリティのくことば——『ロミオとジュリエット』——」『シェイクスピアの文化史』(名古屋大学出版会, 2002年) pp.12-36. 次の批評は、主人公二人の性的欲望を示す言葉に性的差異がちりばめられていることを指摘しているが、性的差異を論ずることに主眼があり、立場を異にしている。Edward Snow, "Language and Sexual Difference in *Romeo and Juliet*," *Shakespeare's 'Rough Magic': Renaissance Essays in Honor of C. L. Barber* Ed. Peter Erickson and Coppélia Kahn (Newark, Del.: U of Delaware P, 1986), pp. 168-92. 一方、ペトラルカ風恋愛の流儀とそこからの出発をロミオとジュリエットの恋愛にも読む批評もある。Evelyn Gajowski, "*Romeo and Juliet*: Female Subjectivity and the Petrarchan Discursive Tradition," *The Art of Loving: Female Subjectivity and Male Discursive Traditions in Shakespeare's Tragedies* (Newark: U of Delaware P, 1992), pp.26-50.
  8. Barbara Everett, "*Romeo and Juliet*: The Nurse's Story," *Young Hamlet: Essays on Shakespeare's Tragedies* (Oxford: Clarendon Press, 1989), pp.109-23.
  9. Theodora A. Jankowski, *Pure Resistance: Queer Virginity in Early Modern English Drama*



(Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2000).

10. 引用はすべて Jill L. Levenson, ed. *Romeo and Juliet* The Oxford Shakespeare (Oxford: Oxford UP, 2000)による。
11. Arthur Brooke の *The Tragicall Historie of Romeus and Juliet* およびシェイクスピアとの相違点については、以下を参照。Geoffrey Bullough, “*Romeo and Juliet*,” *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* Vo. 1. (London:Routledge and Kegan Paul, 1961), pp.267-363.
12. 太田一昭は、引き下げられた Juliet の年齢と早婚の事情について、著作当時の社会背景に照らしても、普通ではなかったと論じている(太田一昭「ジュリエットの年齢」『シェイクスピアを読み直す』[研究社, 2001年] pp.3-19.)。ほかに, Ann Jennalie Cook, *Making a Match: Courtship in Shakespeare and His Society* (Princeton, N.J.: Princeton UP, 1991); Bruce W. Young, “Haste, Consent, and Age at Marriage: Some Implications of Social History for *Romeo and Juliet*.” *Iowa State Journal of Research*, 62 (1988), 459-74.
13. 岩崎は、結婚を「男と女を社会的に結びつける家父長制の仕組みの一部」と、夫婦を「結婚という社会制度に「縛られた」男女」と見ているが、男女の力学関係については明言を避けている。(p.15)
14. Callaghan, p.84-86. 女性の欲望が新しい社会の要求と一致するものと見た Callaghan の論は卓見である。
15. ホモソーシャルボンド(社会的に同質な絆)については次の書を参照。Eve Kosofsky Sedgwick, “Introduction,” *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (New York. Columbia University Press, 1985), pp.1-20.
16. 神父の役割を論じた以下の先行批評は、道徳心や神の摂理の代弁者として神父を論じるものである。J. C. Bryant, “The Problematic Friar in *Romeo and Juliet*.” *English Studies* 55 (1974), 340-50; Douglas L. Peterson, “*Romeo and Juliet* and The Art of Moral Navigation,” *Pacific Coast Studies in Shakespeare* Ed. Waldo F. McNeir and Thelma N. Greenfield (Eugene: U of Oregon Books, 1966), pp. 33-46.

*Synopsis*

**Queering *Romeo and Juliet*:  
The Problematic Nurse  
and an Emergent Ideology of Love**

Naoko Komachiya

An emergent ideology of love in *Romeo and Juliet* appears to have been central and centrally attacked in the controversy over a defiant daughter in a patriarchal society. Thus, a study of the ways in which Shakespeare deals with an integral part of the family, Juliet and her father, reveals, from one perspective — that of how he employs the relationship of the father and the daughter — he uses the father's redemption as negotiation of the father-daughter relationship and reconciliation between the feuding families, all of which mirror the social circumstances of the early modern society. From another perspective — that of why he questions this kinship bond — he employs the relationship among the family for the positive purposes of subversion, thereby again commenting on the social mores of the period. However, Shakespeare does not romanticize or idealize the father-daughter relationship. Rather, in such a relationship he creates a female subject for larger societal issues that inflamed his era. He presents this with those who form a homosocial bond with the heroine to interrogate gender, generational and familial issues, as well as the relationship of the society to the individual. Employing the strategy of Queer Theory, this paper reveals the fiction of forced heterosexual love in a patriarchal society, and then shows that the Nurse is a queer agent who serves as an internal director, manipulating and exerting control over Juliet, ranging from

influencing the development of Juliet's sexuality to helping her depart from a traditional role as an obedient daughter. Her function and impact seem to be closely related to the qualities she possesses. Thus, the paper's primary focus is upon the role of the Nurse who affects cross-gender relationships for either good or ill.